

## JAPANESE: LEVEL I

ひ  
「日づけうた」

いちがつついたち  
一月一日 おしょうがつ

にがつふつか  
二月二日は みんなで こたつ

さんがつみっか  
三月三日は ももの はな

しがつよっか  
四月四日は さくらの はなみ

ごがついつか  
五月五日は こいのぼり

ろくがつむいか  
六月六日は わかばの こみち

しちがつなのか  
七月七日は あまのがわ

はちがつようか  
八月八日は なつやすみ

くがつここのか  
九月九日 むしの こえ

じゅうがつとおか  
十月十日は ハイキング

じゅういちがつじゅういちにち  
十一月十一日 おちばひろい

じゅうにがつはつか  
十二月二十日は

はやく こいこい おしょうがつ

## JAPANESE: LEVEL II

「わたしと小鳥とすずと」 金子 みすず

わたしが両手をひろげても

お空はちっともとべないが、

とべる小鳥は わたしのように、

地面をはやく 走れない。

わたしがからだをゆすっても

きれいな音はでないけど、

あの鳴るすずは わたしのように、

たくさんうたはしらないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、

みんなちがって、みんないい。

### JAPANESE: LEVEL III

「なぜ」 <sup>かわさき</sup>川崎 <sup>ひろし</sup>洋

なぜ <sup>かぜ</sup>風は

<sup>あたら</sup>新しい<sup>わ</sup>割りばしのように かおるのだろう

なぜ <sup>とり</sup>鳥は

<sup>そら</sup>空を<sup>すべ</sup>滑れるのだろう

なぜ <sup>なつみかん</sup>夏蜜柑は

<sup>す</sup>酸っぱいのだろう

なぜ 海は

<sup>いろ</sup>色を<sup>か</sup>変えるのだろう

なぜ たった一人<sup>ひとり</sup>の人<sup>ひと</sup>を<sup>あい</sup>愛するようになるのだろう

なぜ <sup>なみだ</sup>涙は<sup>うれ</sup>嬉しいときにも<sup>で</sup>出るのだろう

なぜ フリュートはあんなに<sup>とお</sup>遠くまでひびくのだろう

なぜ 人は<sup>かお</sup>けわしい顔をするのだろう

なぜ ギターの<sup>げん</sup>弦は5本でなく<sup>ごほん</sup>7本でなく<sup>ななほん</sup>6本<sup>ろっほん</sup>なのだろう

なぜ

なぜ

なぜ

そして 人は なぜ

いつの<sup>ころ</sup>頃からか

なぜ

を言<sup>い</sup>わなくなるのだらう

## JAPANESE: LEVEL IV/NATIVE

「歌はどうして作る」 よ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup> あきこ<sup>こ</sup>  
与謝野 晶子

歌はどうして作る。

じつと<sup>み</sup>観、

じつと<sup>あい</sup>愛し、

じつと<sup>だ</sup>抱<sup>つく</sup>きしめて作る。

<sup>なに</sup>何を。

「<sup>しんじつ</sup>真実」を。

「<sup>しんじつ</sup>真実」は何<sup>どこ</sup>処<sup>あ</sup>に在る。

<sup>もっと</sup>最<sup>ちか</sup>も<sup>あ</sup>近く<sup>あ</sup>に在る。

いつも<sup>じぶん</sup>自分<sup>いっしょ</sup>と一<sup>いっしょ</sup>所に、

この<sup>め</sup>目<sup>み</sup>の<sup>もと</sup>観<sup>もと</sup>る<sup>もと</sup>下、

この<sup>こころ</sup>心<sup>あい</sup>の<sup>まえ</sup>愛<sup>まえ</sup>する<sup>まえ</sup>前、

わが<sup>りょうて</sup>両<sup>なか</sup>手<sup>なか</sup>の中<sup>なか</sup>に。

「<sup>しんじつ</sup>真実」は

<sup>うつ</sup>美<sup>にんぎょ</sup>く<sup>にんぎょ</sup>しい<sup>にんぎょ</sup>人<sup>にんぎょ</sup>魚、

<sup>は</sup>跳<sup>か</sup>ね<sup>おど</sup>且<sup>おど</sup>つ<sup>おど</sup>踊<sup>おど</sup>る、

ぴちぴちと踊る。

わが両手の中で、

わが<sup>かんげき</sup>感<sup>なみだ</sup>激<sup>ぬ</sup>の<sup>ぬ</sup>涙<sup>ぬ</sup>に濡<sup>ぬ</sup>れながら。

<sup>うたが</sup>疑<sup>う</sup>ふ<sup>ひと</sup>人<sup>き</sup>は<sup>み</sup>来<sup>み</sup>て<sup>み</sup>見<sup>み</sup>よ、

わが<sup>りょうて</sup>両<sup>なか</sup>手<sup>なか</sup>の中<sup>なか</sup>の人<sup>なか</sup>魚<sup>なか</sup>は

しぜん うみ で  
自然の海を出たまま、

一つ一つの鱗が

だいらせき じゅんぱく え  
大理石の純白のうへに

ばら はな はんしゃ ち い  
薔薇の花の反射を持つてゐる。